内外の視点

留学生受け入れの将来像

東京大学大学院 総合文化研究科准教授 ゴチェフスキ　ヘルマン氏

Hermann Gottschewski　音楽学者・作曲家。フライブルク音大のピアノ科卒業後フライブルク大学で哲学博士（音楽学）号を取得。ドイツのフライブルク大学・フンボルト大学の助教・講師を経て、2004年以来東京大学大学院総合文化研究科の助教授・准教授。専門は音楽学、研究領域は西洋音楽史等。

―まず、先生の母国ドイツの大学での留学生受け入れや国際交流の状況についてお教えください。

ドイツでの国際交流を語るとき、日本やアメリカなどと事情が大きく異なるのは、EUという枠組みがある点です。ですからドイツでの国際交流は2段階になっていて、1つはEU内での国際交流、もう1つがEU以外の国々との交際交流です。またEU内の国際交流では、例えばドイツとオーストリアでは同じドイツ語が話されているので、他の外国との交流とはかなり違う状況です。

EU各国は自国の言語を重視していますが、これも時代とともに変化しているようです。ドイツでは、私が教育を受けた時代では小学5年のときに、第一外国語を英語・フランス語・ラテン語から選択するようになっていました。その後、EUの拡大が進んで、スペイン語など選択できる外国語の幅が広がりました。「ヨーロッパ学校」というのが作られ、EU諸国の言語はたいてい学ぶことができます。

留学に関しても、EU内での交流を盛んにする多くのプログラムがあり、援助金も充実しています。現状は、留学生の受入れも派遣もEU諸国間がメインになっていますが、これにはEUの統一という大きな課題を抱えていることも関わっています。

―日本の大学のグローバル化には何が必要だとお考えですか。

今盛んにグローバル化が叫ばれていますが、私はグローバル化と国際化を同じものと考えてはいけないと思います。今のグローバル化の流れは、言語の伝統ある文化を消滅させていく傾向があります。各国、各大学で英語教育に力を入れ、他国の人々と簡単に意見交換できる言語があることは重要なことだと思います。ですが、大学で教えることも全て英語になり、学問が英語ばかりになると、一般の人々と学者のコミュニケーションがうまくいかなくなるのではないでしょうか。

真の国際化には互いの尊重が必要 近さは大きなメリットに

例えばヨーロッパでは昔、ラテン語が現在の英語の役割を担っていました。私の専門は音楽学ですが、400年前にプレトリウスという音楽家によってラテン語で書かれた音楽史の専門書があり、今読んでもたいへんおもしろい良書です。ですが、彼はドイツ人なのに「本来は国内の多くの人々に読ませるためにドイツ語でも書くべきだが、一つ一つ翻訳するのは大変だった。いつか誰かがドイツ語で書いてくれたらありがたい」と述べているのです。当時、学者達はラテン語での読み書きが出来ましたが一般の人々は出来ず、ラテン語は限られた人々の言語だったのです。

大学の英語化が進むことで、実は現在でも同じようなことが起こっています。本来あるべき姿は、例えばドイツ人の学者が日本に来て、日本語での優れた論文を読むことができ、一般の人々とも会話し互いに理解ができる、一方で日本人の学者がドイツに行けば、ドイツ語での論文が分かり一般の人々ともドイツ語で交流ができるといった形だと思います。これが「国際化」ではないでしょうか。西洋音楽を研究する学者は、イタリア語・ドイツ語・フランス語・ラテン語・英語の5つは必修となっています。私の場合は韓国の学者と共同研究するのに韓国語を学びましたし、日本語での論文も書いていますが、これにつけて食べるとり天の、ふわりと揚げたまろやかな食感は、老若男女を問わず人々を魅了してやまない。

とり天の発祥時期や発案者は定かではない。しかし、衣があってボリュームが出ることや、安価で簡単な材料で誰でも気軽に作ることができるので、古くから県民にとって欠かせない家庭料理として愛されている。

ます。このように、真の国際化には互いの文化や言語を尊重し学び合うことが必要だと思います。

―日本の大学に留学生を増やすにはどうしたらいいでしょうか。

ここ駒場キャンパスでも英語での新しいプログラムが導入されています。日本の大学に入るにはかなり高い日本語能力が必要で留学生には難しくなっています。ですから英語のコースを作ろう、という方向で動いています。ただ気になるのは、英語コースで入ってきた外国人と、日本人の学生同士が交流しているようにみえないことです。留学生には、しっかり日本語を学んでほしいですし、大学としても留学生の日本語力が上がるように体制をもっと整えるべきです。国際化のためにも、留学生と日本人学生が一緒に学び合う環境が必要です。そういった意味では、ここの大学院ではある意味理想的な交流ができていると思います。留学生が全体の4割ほどを占め、その大部分が韓国や中国などのアジア出身です。留学生は日本文学を研究し、日本人は外国文学を研究しています。EU内もそうですが、近いというのは大きなメリットです。近くの国々からまず留学生を受入れる、という考えもできるのではないでしょうか。

全国ご当地料理

第15回 とり天（大分県）

とり天　（大分県東京事務所提供）

大分県は全国有数の鶏肉消費県だ。県の北部では「鶏のから揚げ」が好まれるが、別府市や大分市をはじめ全県で好まれている郷土料理が「とり天」である。

とり天とは、文字通り鶏肉をてんぷらにしたものだ。だが、とり天と呼ばれるには次の6つの原則があるという。①鶏肉をたれに漬け込んでいること②衣がついていること③一口サイズであること④骨がないこと⑤キャベツの千切りなど生野菜が添えられていること⑥何らかのつけだれで食べること、である。

鶏肉のてんぷら 県民に欠かせない家庭料理

作り方の基本は、まず鶏肉の皮をはぎ、一口サイズに切り分ける。使用する部位はもも肉、胸肉、ささみ等好みに応じて使うことができる。そして、みりんやしょうゆなどで作ったたれに漬け、味をもみ込む。次にボウルに小麦粉と鶏卵を入れて混ぜ、ぼてっとするまで水を加えて衣を作る。

美味しく作るポイントは二度揚げで、まず、鶏肉を衣にくぐらせて180度の油で3分間揚げる。油を切って上からアルミホイルをかぶせ、余熱で5～10分、中まで火を通す。さらにもう一度、180度の油で軽く揚げる。このように二度揚げすると、衣はからり、中身はジューシーに仕上がり、冷えても肉汁が残っていて美味しいという。

つけだれには、大分特産のカボス入りポン酢や酢醤油などが使われ、それにからしが添えられる。これにつけて食べるとり天の、ふわりと揚げたまろやかな食感は、老若男女を問わず人々を魅了してやまない。

とり天の発祥時期や発案者は定かではない。しかし、衣があってボリュームが出ることや、安価で簡単な材料で誰でも気軽に作ることができるので、古くから県民にとって欠かせない家庭料理として愛されている。

女力の日本史

第十五回「源氏物語」

平安が生んだ奇跡の物語 世界的古典の評価定着

平安時代に和歌と並んで女性が多くの傑作を残した文学ジャンルが日記そして物語だ。中でも紫式部が綴った『源氏物語』は世界文学史上の傑作との評価が高い。この時代の文学作品は平仮名主体の流麗な文体の美しさで際立つ。その頂点に立つ『源氏物語』を紹介していこう。

『源氏』は凄い！

最初に私事で恐縮だが、大学を目指す浪人生の頃、受験勉強に疲れると気分転換や道元『正法眼蔵』など高僧たちの引き締まった文体の著作が、難解ながら音読すると極めて素晴らしい。しかし高僧たちの名文も及ばない、比類なき美しさ、比類なき完成度を感じさせる作品があった。それは、『源氏物語』であった。

物語文学

「驚き」の理由の一つは『源氏』が千年も昔の物語であることだ。紀元1001年の記録にその名が初出し、すでに多くの部分が完成していたとされる。当時の世界、いや紀元1000年までの世界史において、いかなる文明の先進地においても『源氏』ほど洗練された文学作品は類を見ない。しかも平仮名という日本独自の文字を使い始めてわずか150年ほど、しかも女性がこの稀代の傑作を書いた。

同時代に最も文化が成熟していたのはアッバース朝のイスラーム世界であろう。興味深いことに完結した物語をシリーズ化した『千夜一夜物語』という、多少なりとも『源氏』に似た形式の物語が10世紀半ばに集大成されている。

紫式部

『源氏』の作者・紫式部は当時一流の学者・歌人・漢詩人であった藤原為時（949？～1029？）の娘だが、生没年は知られない。『紫式部日記』も残し『枕草子』の作者・清少納言や情熱歌人・和泉式部に対する辛口の人物評が知られている。感豊かな物語を紡ぐ女性でありながら、怜悧な分析力も兼ね備えていた。

父の生年が949年で、『源氏』は1001年にはおおよそ出来上がっていた。仮に父が20歳の時に紫式部が誕生したのだとしても、たった32歳までに悲喜交交の人生曼陀羅である『源氏』を書き上げたのである。この驚異の女性作家は1965年、ユネスコ世界偉人暦に日本人として初めて選ばれ、ダンテやシェークスピアとともに顕彰された。いまや『源氏』は日本の古典であるのみならず、万国の人が愛読する世界的古典となっている。

に日本文学の名作を音読していた。明治以降の近代文学からはもっぱら詩で、北原白秋、島崎藤村、萩原朔太郎、宮沢賢治、吉田一穂など、近代詩の全集を次々音読した。

一方古典では和歌はもっぱら『万葉集』で、『枕草子』、『徒然草』などの著名随筆もちらほら。また文学ではないが散文では空海『秘蔵宝鑰』や道元『正法眼蔵』など高僧たちの引き締まった文体の著作が、難解ながら音読すると極めて素晴らしい。しかし高僧たちの名文も及ばない、比類なき美しさ、比類なき完成度を感じさせる作品があった。それは、

いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひけるなかに、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。

この名高い書き出しから始まる物語、『源氏物語』（以下『源氏』）である。二十歳前の学生に『源氏』の意味をくみ取るのは極めて難しい。しかし流れるような文章のリズム、バランス、響きなど、『源氏』の芸術性は「肌で分かる」。否応なく感覚を通して伝わってくるのである。

かつて日本では幼時から「子曰く云々」と孔子の『論語』を大声で音読するのが学問のはじめだった。『論語』も響きの美しい古典である。幼児に意味は分からないが、その響き、いわば思想の持つ響きが、体に染み込み人格形成のベースとなったのである。「『源氏』は凄い！」、それが当時の筆者の素直な感動であり驚きであった。

外国人留学生を募集する　学校案内　広告特集

隅田川のほとりで 一緒に日本語を勉強しましょう！

東京リバーサイド学園　伝統文化のまち 浅草

日本語教育振興協会認定校　http://tokyoriverside.co.jp/

◆ＪＰ　ｅラーニングスクール
http://jpelearning.com/
ＷＥＢでライブレッスン
インターネットで日本語のライブ授業を行っています。会話中心の役立つ内容で、誰でも参加可能。ぜひご活用下さい！

●日本語基礎からネイティブレベルまで
●１～２年コース
●４月、７月、１０月、１月に開講
Tel +81(3)-3847-4871　Fax +81(3)-3847-7961
MAIL: trs@tokyoriverside.co.jp
〒111-0033　東京都台東区花川戸2-2-5
Facebook:http://www.facebook.com/trs.japanese

●４月入学受付中！入試は出願時に受験も可●半日学び半日働ける学習環境●昼1部午前・昼2部午後必修
●専門士の称号・大学3年次編入学可（留学生学費減免特待制度あり）
■２年制情報ビジネス学科　国際情報ビジネス専攻　情報システム専攻など
内容/ビジネス実務・英語、経営学、貿易実務、情報処理、Webデザインなど
●高度専門士の称号・大学院入学資格付与（2年制修了後3年次へ編入可）
■４年制マルチメディア学科　ＣＧ／Ｗｅｂデザイン専攻　デジタル情報インストラクタ専攻

■ 過去19年間で204名が就労ビザ取得。165名が大学等へ進学。詳細はSCITで検索。http://www.scit.ac.jp
新宿情報ビジネス専門学校
〒164-0001 東京都中野区中野5-15-2 ☎03-5380-0777 JR中央線・総武線，地下鉄東西線中野駅北口・徒歩4分